

第 37 回 全国大会 研究ワークショップ 開催案内

日時：2022 年 12 月 17 日(土)10:30~12:00 会場：金沢大学人間社会第 2 講義棟

研究ワークショップ① 207 教室 研究発表

世界に拡散するフランス観光巡礼地ルルドの研究

代表者：舂谷 鋭（立教大学）

19 世紀ヨーロッパで相次いだ聖母マリアの出現事例の中で、圧倒的成功を収めたのがフランスのルルドである。世界中から年間約 9,000 万人の来訪者を受け入れ、関連雇用は約 300 万人、観光消費支出が GDP の約 7% を占めるフランス（いずれもコロナ前）のなかでも、パリに次ぐ年間 600 万人が訪れる国際巡礼地について、本ワークショップでは、日本を含むアジア等のコピー版ルルドの調査報告とともに、その要因を「観光」に見出し、19 世紀以降の聖母出現が「観光」に適合する要素を有していた点で、それ以前とは質的に異なる事実を実証したい。

本研究は科研費基盤 C「複合現実体験としての聖地巡礼」（2019-2022、代表者：石橋正孝）の最終報告の一部である。

問い合わせ先 舂谷 鋭（代表者）

masutani@rikkyo.ac.jp Tel：048-471-7448

研究ワークショップ② 208 教室 研究発表 ディスカッション

発酵ツーリズムを地域振興につなげるには？

代表者：米田 晶（富山福祉短期大学）

発酵食品および発酵調味料は 2013 年ユネスコ世界無形文化遺産に登録された「和食」の重要な要素のひとつであり、地方圏の食文化、生産、歴史、風土を色濃く反映しています。しかし、しょうゆ、みそ、醸造など日本の発酵食品事業の多くは小規模経営であり、世代交代や食生活の洋食化、大量生産ができないなど、その継続が危ぶまれています。「発酵ツーリズム」研究の目的の一つは、観光を活用した当該産業の存続および地域経済活性化への寄与にあります。

私たちは「発酵ツーリズム」を「発酵食を動機づけとする観光」、つまり、そこに行かなければ味わえない地域固有の「食」および「食文化」の豊かな体験を提供する観光形態であり、フードツーリズムやガストロノミーツーリズムの一形態として捉えています。

本ワークショップでは、発酵食品を動機づけとする観光活動への取り組みを検証し、「発酵ツーリズム」について多様な観点からの議論を深め、今後の方向性について検討することを目的とします。

問い合わせ先 米田 晶（代表者）

E-mail：yoneda@urayama.ac.jp Tel：0766-55-5567

「移動」がもたらす地域社会の変容と偶有的価値の創出

代表者：中子 富貴子（公立小松大学）

交通や情報技術の発展、社会制度の変化を伴うグローバル化によって、現代社会は「移動」を前提に社会が構成されるようになった。観光や移住を含む国内外の移動は社会生活の前提になり、移動によって日常と非日常を区分することも困難になっている。こうした状況を、ここでは「移動前提社会」と呼ぶ。

移動を伴う観光の価値は観光客の消費によって生み出され、経済的価値として地域に還元される。しかし、観光がもたらす公益的価値や文化的価値を地域側がどのように享受するかについては、これまで具体的な仕組みが十分に議論されてこなかった。

このワークショップでは、移動を伴う観光によって移動者と地域住民の関係が変容し、そこから新たな価値が創出する可能性、すなわち「移動が生み出す価値」に注目した。特に、移動による自己と他者の変容が生み出す「予期せぬ文化的価値（偶有的価値）」の持つ意味を、具体的な事例をもとに議論する。また、移動者と地域社会の間で新たな価値創出をもたらす条件とは何か、観光による「交流人口」や移住者、さらには「関係人口」を「移動」の視点で一括して扱えないかなどのも話題も取り上げる。

ワークショップでは、研究会メンバーによる閉じた議論ではなく、フロアとのオープンな議論を通して問題意識を共有したいと考えている。今後につながる有益な示唆を生み出すために、積極的な議論への参加を期待したい。

なお、このワークショップを主催する研究グループは、「移動前提社会」における地域住民と移動者による新たなコミュニティ形成プロセスに焦点を当て、2022年度から共同研究を開始している。

内容：

1) 10：30－10：35 趣旨説明

2) 事例紹介と論点整理：

①10：35－10：45 事例紹介：音楽家の組織的移住による文化的価値創出の取組み
(島根県浜田市・江津市)

②10：45－10：55 調査事例：コミュニティ交通を通じた偶有的価値創出の可能性
(富山県朝日町「ノッカル」、その他)

③10：55－11：10 論点整理

3) 11：10－12：00 ディスカッション

問い合わせ先 中子 富貴子（代表者）

E-mail：fukiko.nakako@komatsu-u.ac.jp Tel：090-2485-4344

2040 年に向けた「観光教育」のグランドデザイン ～共創観光の未来を見据えて～

代表者：藪下 保弘（かなざわ食マネジメント専門職大学）

2018（平成 28）年 11 月に中央教育審議会より、「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」が公表されています。周知のとおり当該答申は、Society5.0/Industry4.0、人生 100 年時代などのキーワードに象徴されるように、未曾有のパラダイム・シフトに対応できる人材の育成と知的創造の拠点となる高等教育機関の将来構想について総合的に検討がなされているものと解されます。

改めるまでもなく、教育は単一国家のみならず人類が持続的に繁栄を成すため根幹と述べても過言ではないでしょう。一般教育が社会の進展に合わせて変化すれば、観光教育も否応なく対応が求められます。

こうした社会の変化を正面から受け止め、パネル・ディスカッションを中心に、リカレント、イノベーション、多様性、アクティブ・ラーニングなど、現代社会・教育のトピックを多面的に議論の俎上にのせるとともに、未来志向教育の事例を紹介しながら、本ワークショップのタイトルに関するコンセンサスの形成を目指します。

問い合わせ先 藪下 保弘（代表者）

E-mail : y-yabushita@kbg.ac.jp Tel : 076-275-5933

日本観光振興協会と学会との連携事業報告(持続可能な観光地づくりを中心として)

代表者：清水 哲夫（東京都立大学）

昨年度より開始した学会と(公社)日本観光振興協会との連携事業の進捗について報告致します。

(1)連携事業の概要説明ならびにテーマ 1 【観光分野における新技術対応とその地域展開】に関する報告、清水哲夫（東京都立大学）（15 分）

DX 等今後予期される新技術の地域観光への活用を念頭にして、これまで新技術の地域展開を目指している企業との意見交換を中心とした活動内容を説明いたします。

(2)テーマ 2 【持続可能な観光地づくりに向けた戦略的観光地マネジメントの構築と活用】に関する報告

1) 持続可能な観光地づくりのための考え方、合意形成の在り方などに関する研究の進捗状況報告、古屋秀樹（東洋大学国際観光学部）（12 分）

2) 観光庁としての持続可能な観光の促進に向けての歩みや旅行業者等が取り組む意義について、大野一（観光庁旅行振興参事官付）（12 分）

3) 沖縄を中心とした地域コミュニティと調和したレスポンスブルな観光地のあり方と今後の展望、中島泰（(公財)日本交通公社環境計画室長 兼 沖縄事務所長）（12 分）

4) 日本観光振興協会における持続可能な観光への取り組み、安本達式（(公社)日本観光振興協会総合調査研究所）（5 分）

5) ディスカッション（約 15 分）

(3)まとめ

問い合わせ先 清水 哲夫（代表者）

E-mail : t-sim@tmu.ac.jp Tel : 042-677-2720

観光教育・観光研究のコロナ禍の先（交流促進委員会企画）

代表者：山本 清龍（東京大学）

本交流会は、コロナ禍の 3 年間に経験した観光に関わる教育・研究について、若手会員および入会歴の浅い会員のそれぞれの立場から悩み、不安、課題を共有し、コロナ禍の先を見据えた取り組み、活動を議論することを狙いとする。議論は、参加者同士の意見交換（グループワーク）によって行い、多様な領域の会員同士の交流、理論と実践について相互理解を深める機会としたい。

なお、参加者としては 20 代から 40 代の若手会員及び入会歴の浅い会員を対象として想定するが、それ以外の方の参加も歓迎する。また、大会開催中の 17 日、18 日は、本交流会以外の時間においても同じ会場において交流促進委員会メンバーが常駐し、会員相互の交流機会を確保するので、ぜひ気軽にお立ち寄りいただきたい。

問い合わせ先 高久聡司（目白大学）

E-mail : takaku@mejiro.ac.jp